
星屑王子

北城 十

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星屑王子

【Nコード】

N2355B

【作者名】

北城 十

【あらすじ】

砂漠の国に住む貧しい少年と、星の国から来たと言う少年の、ある一夜とその後の話。

砂漠が銀色に輝く夜。

「あんた何してんだ」

夜中に街を飛び出た命知らずな少年・ティダが、砂の上に寝転ぶもう一人の少年に問い掛けた。

こんな時間に街を出るのは自分くらいのものだと思っていたから、ティダはその姿を見てとても驚いていた。

いや、原因はそればかりではない。

年のころは自分と同じく十三・四といったところだろう。しかしティダとその少年はそれ以外は本当に似ていなかった。毎日日の下で働くティダとは違い、肌は白く髪は銀糸のようで、白い上等な絹の服を着て、キラキラとした銀の飾りをたくさんつけている。まるで星が落ちてきたようだった。この地方の人は皆髪も肌もこんなに白くはない。

「迎えを待ってるんだ」

「やっぱり……空から来たのか？」

「空？」

ぼんやりとした口調だった。夢の中に住んでいるような、そんな気持ちにさせる声。

「そう、そうだよ。僕は星の世界から来たんだ」

やっと思い出したというような楽しげな口調。クスクスと笑って少年は砂の上を駆け回った。

「僕はね、すごくキラキラした所から来たんだ」
「ここよりいい場所か？」

ティダが聞くと少年は動きを止め、表情なく空を見上げた。

「どうだろう。住みやすいのは確かだけど」
「じゃあ何か不満があるのか？」

少年は寝転がったまま腕を組んで考え込み始めた。ティダは少年の横に腰を下ろす。

「寂しくて、とつてもつまらない所だよ」
「嫌いなのか？」

さらにティダは問い掛け続けた。乾いた風は夜になり、昼の暑さが信じれないほどにひんやりと冷たい。

「考えてみたけど、分かんないな。僕はあそこじゃないと生きていけないから」
「そうか」

不意に少年が起き上がり、ティダを見つめた。キラキラとした瞳は夜明けの近づいた空のような淡い紫の色をしている。

「お前はどんな所に住んでるんだい？」
「俺は、すごく小さな家に住んでる。何だか暗くてヤナ所だ」
「嫌いなのか？」

少年がティダが言ったのと同じように聞いてきた。

ティダは考える。毎日毎日同じことの繰り返しで、雇主は厳しく、友達も作れない。だから嫌気がさして、自慢の足を使って街を飛び出した。せめてものの気晴らしを、と。

「嫌いだよ」

「抜け出せるなら親と別れてもいいくらい?」

「親父もお袋も、もういない。でも逃げてても生きていけない」

「ふうん」

二人は無言で空を見上げた。星も月もキラキラと輝いている。いきなりすくと少年が立ち上がる。花のような甘い香がふわりと漂った。

「君の名前は?」

「え、あ、ティダだけど」

「どこで働いてる?」

「街の農園」

「ありがとう」

勢いにおされて聞かれるままに答えると。少年はにっこり笑って礼を言い、歩き出した。

「どこ行くんだ?」

「帰る」

「迎えは?」

「もう頼らないことにした」

何があったのか素晴らしく晴れやかな声で少年は答えた。その姿はぼんやりと輝いているようだ。

「名前は？ あんたの、教えろよ」
「ステア」

ただそう答えると、軽やかな足どりですぐに消えていった。
あとにはティダだけがのこり、今までの事が全て夢であったかの
ような心地になった。

寝転がり、ステアと同じように空を眺めてみた。幾数千の星が彼
の髪のように瞬いていた。

「ちょっとティダ！ 砂漠で寝るなんて、死ぬ気かい?!」

気付いたら寝ていたらしく朝で、家に戻ると雇主の奥方がかんか
んになって怒っていた。

「生きていたからいいけど、死んだら国王陛下に何て言い訳したら
よかったのか」

「国王陛下？」

いつもなら

「国王」

とぞんざいに呼ぶその女が、今日はなぜか

「国王陛下」

と丁寧に呼ぶ。不自然さにティダが問い掛けると、女は不機嫌そう
な声を出した。

「今朝早くに使者が来てね、お前を宮殿に迎えたいって。まったく

何なんだかね」

どこかでコネをつくるような事をした覚えはなく、不思議に思いながら、追いついてられるまま荷物をまとめ、やってきた使者とともに宮殿へと向かった。

ティダがいくら尋ねても使者は無言だ。

わけもわからないままたどり着いた宮殿で、一番にティダを迎えたのは国王だった。

「おうおう、よく来てくれたな」

王はおおらかで優しい雰囲気的人物で、ティダを笑顔で迎えた。しかし、その顔には全く見覚えがない。

「いきなりで悪かったな。それというのも、末の王子がどうしても言ってもきかなくてな」

「え?」

「ちょっと変わった子だが、悪い子ではない。仲良くしてやっておくれ」

ティダの中にちょっとした予想がうまれる。

まさか…………。

サラサラと、上品な衣ずれの音がした。

「ティダ、これで抜け出せるだろう?」

聞き覚えのある声に、ティダは勢いよく振り返った。

(あいつ…………!)

そこには星の世界の王子様が満面のえみで立っていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2355b/>

星屑王子

2010年12月29日22時34分発行